

神長善次大使著「欧州の知恵―世界に生きる新しい日本の対応―」

講談社 1992年4月20日刊を読む

2. 誠心誠意とは何かを考える

- (1) 誠心誠意は、清涼なる心境に発する。その心境に心と体をなじませることにより、何か落ち着いた虚心の世界が展開し、精神が充実してくるのを覚えるものである。
- (2) 皇居宮殿の御謁見の控えの鳥の間で、御用掛(御通訳)のため、要人の到着を待つ間に接する窓外の山水の風景は、まさにその心境を呼び起こさんとする風景であり、私は、その前に一人静かに佇むのが好きであった。無心の境地に体がなじむところに要人が到着し、陛下との御謁見の準備が整う。すなわち、要人との御会話に、誠心誠意尽くされる陛下(お仕えした昭和天皇)の御用掛としての心の準備が整うのである。その準備がなければ、昭和天皇のまごころ溢れるお話を相手に通じされることは困難であると思われた。昭和天皇が、離任の大使夫妻に接せられ、在任中の労をねぎらわれるお姿は、本当に誠心誠意そのものという感じで、日本を去る大使夫妻の感動もいかにばかりかと思われるのであった。
- (3) 昭和 63 年の 3 月にモロッコのシディ・モハメッド皇太子を公賓として日本にお招きした折、宮中にて公式晩餐会が催された。晩餐を前にして連翠の間で陛下が庭園の御説明をなされる。そして豊明殿の晩餐、石橋の間での飲み物とつづき、最後に陛下が、皇太子に安全な旅をお祈りしますと御挨拶なされ、晩餐の宴が終わった。宵のとばりにつつまれた皇居の中を車列が去っていく。同乗した駐日モロッコ大使が、陛下のお人柄とその御誠実な態度に感激し、何度となく、よかった、すばらしいと口を極めていたのを思い出す。年若い皇太子も同じ感慨を持たれたに相違ない、と察している大使の心中が読みとれるようであった。
- (4) かつてスーダンの首相が来日した。クーデターといった幾多の生死の狭間を経験しつつもスーダンに民主主義を芽生えせしめんと努力したサディク・アル・マハディー首相その人である。氏はいう。過去の過ちを犯した政権の債務は、これを責任を持って誠実に支払う。しかし、いま置かれたスーダンの状況を理解してほしい。教育改革も必要、経済の立て直しも必要、それ故に 4 ヶ年計画を策定した。自分は政治に野心を持たずに支援をしてくれる日本を評価しており、それ故に日本を勉強したくて訪日した。日本に期待するところは大きい... ..と。この人が離日に際し、お世話になった日本人の誠心誠意に尽くす姿に心打たれたと語っていたという。
- (5) しかし、心打たれたのは、私どものほうである。自分の身命を抛って荒廢の地に民主主

義を育て、もって国の興隆を図ろうとするその人は、実に謙虚であり、誠実であった。誠心誠意民主主義の実現に努力している人に見えた。その姿は、かえって雄々しく美しく映じた。

(6) 誠心誠意の姿勢は、人の理解を得、人に共感を与え、人を動かす。時に時間がかかるが、誠心誠意なる努力は、組織に作用し、国際機関や国の政府に大きな影響を与えていく。外国の識者の多くが、訪日して日本国民に接し、その誠意に満ちた対応ぶりに感激、感謝して帰国する事実はよく経験し、よく聞く話である。われわれのまごころが通じたわけで、日本人として当たり前とってしまえばそれだけであるが、このこと自体なんという誇りある行為であろうか。日常生活、国際交流、外交、といかなる場にあっても誠心誠意の及ぼす力は大きい。われわれは、しかとそのことを銘記すべきである。

P.171 ~ 175

[コメント]

神長善次大使のエッセイ集「欧州の知恵」は日本人のアイデンティティとは何か、その本質に迫る名著。心を落ち着け熟読すべき著作と考える。

- 2009年6月20日林明夫記 -